Miyazaki Women's Junior College

通釈　十月

志賀の山越えをする人々の絵にそえる歌

名前は昔ながらに変わらないという長等山ですけれど、時雨の降る頃はその名の通りにはゆかず、やはり木々が色変わりして昔とはちがった山みたいに見えることですよ

参考　この歌は、拾遺和歌集　一一三九番に収められている。「ふる時は猶あめなれどかみなづきしぐれに山の色はそめけり」（古今和歌六帖）のように、時雨が木の葉を紅葉させるというとらえ方の歌は多い。

十一月　賀茂臨時祭みるくるま

一八二　ちはやぶるかものかはぎりきるなかにしるきはすれる衣なりけり

語釈　○賀茂臨時祭　賀茂神社の、陰暦十一月下の酉の日に行なわれる祭。四月中の酉の日の祭に対して言う。○ちはやぶる　神、あるいは広く神に関する語にかかる枕詞。○かものかはぎり　賀茂の川霧。賀茂川にたつ霧。○きる　「霧る」と「着る」の掛詞。「霧る」は、霧がかかる意。○しるき　形容詞「著し」の連体形。はっきりしているの意。○すれる衣　ラ行四段活用動詞「摺る」命令形＋完了の助動詞「り」連体形。賀茂祭に供奉する者は、山藍や鴨跖草（つきくさ）などの草木の汁で模様を摺り付けた衣を着した。

通釈　十一月

賀茂の臨時の祭見物の車の絵にそえる歌

臨時の祭が行なわれる今日、賀茂川には霧がたちこめていますけれど、その中でもはっきりと見えるのは、祭に供奉している人々の摺り衣でしたよ。

十二月　仏名おこなふいへ

一八三　冬やまの雪にはこれるあはれきのうへにぞくゆるのこすつみなく

語釈　○仏名　陰暦十二月十九日から三日間、朝廷および諸国の寺院で仏名経を読誦する法会。一年間の罪障を懺悔し、過去・現在・未来の三世仏の御名を唱えることによって罪を消滅しようとする儀式。○ゆきまに　「ゆきま」は「雪間」で、雪の消えた場所と雪の降り止んでいる間の、空間・時間双方の意味がある。○これる　ラ行四段活用動詞「樵る」命令形＋完了の助動詞「り」連体形。○くゆる　ヤ行上二段活用動詞「悔ゆ」連体形とラ行四段活用動詞「燻る」連体形との掛詞。

通釈　十二月

仏名会を行なう家の絵にそえる歌

雪の晴れ間をぬって、雪の間からようやく伐ってきた木。ああ、この木が燻ぶり煙となって消えてしまうように、罪障消滅することを願って、私はこの一年の罪を悔い仏名を唱えるのですよ。

（平成七年一二月十日受理）

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

いなおほせ鳥　稲負鳥。呼子鳥・百千鳥とともに、古今伝授における三鳥の一つ。鶺鴒・川原ひわなど諸説があるが、不明。順は『倭名類聚抄』に「万葉集云、稲負鳥（其読伊奈於保勢度利）」と記すが、万葉集にはいなおほせどりの語は見えない。

通釈　九月

小鷹狩りをするところの絵にそえる歌

人里遠く離れたので、日が暮れてしまったらこの野辺に泊まらなければならないな、稲負鳥に宿を借りましょうか。

参考　惟喬の親王のともに狩りにまかりける時に、あまの河といふ所の河のほとりにおりゐて、酒などのみけるついでに、親王のいひけらく、「狩りして天の川原にいたるといふ心をよみて、さかづきはさせ」といひければ詠める　在原業平朝臣

かりくらしたなばたつめにやどからむあまのかはらに我はきにけり　（古今和歌集　四一八）

伊勢物語でも有名なこの歌をふまえて、あちらは天の川原だから織女だけれども、こちらはありきたりの野辺だから、同じ宿を借りるにしても相手は稲負鳥くらいだというのである。

月夜にころもうつ処

一八〇　風さむみなくかり金にあはすればよるの衣はうちまさりけり

語釈　○ころもうつ　布に光沢やしなやかさを出すために、砧で打つ。○あはすれば　雁の鳴き声に合わせての意と、なく雁の抱いているであろう悲しみに自分の思いを重ねる意。○よるの衣　夜寝るときに着る着物。「蝉の羽の夜の衣はうすけれど移り香こくもにほひぬるかな」（古今和歌集　八七六　紀友則）

通釈　月夜に衣を打つところの絵にそえる歌

風が冷たいので、鳴きながら飛んで行く雁の声もわびしげに聞こえます。その声にあわせるように砧を打つと、私の物思いは一層つのって、夜の衣をますます打ってしまうことですよ。

参考　恋人と過ごすべき夜に、一人砧を打つ女性の姿である。おりしも聞こえてくる悲しげな雁の声を聞くと、物思いは一層つのって眠ることもできない。打っているのが夜の衣であることも、一人の侘しさを強調している。

十月　しがの山ごえの人々

一八一　名をきけば昔ながらの山なれどしぐるる比は色かはりけり

語釈　○しが　志賀。滋賀県大津市および志賀郡の地。琵琶湖の西南岸にあたる。「志賀の山越え」は、京都市左京区北白川から山中峠を経て、大津市に抜ける峠道。○ながら　「昔ながら」（昔のままの意）と「長等山」の掛詞。「長等山」は近江の歌枕。現在の滋賀県大津市、三井寺の背後の山。北は比叡山に、南は逢坂山に接する山稜。志賀の山越えをすれば、目にする山である。○色かはりけり　時雨に山の木々が紅葉するのである。

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

八月　またあふさかの関にこまむかへにゆく

一七七　なににわれよはにきつらん相坂のせきあけてこそ駒も引きけれ

語釈　○あふさかの関　滋賀県大津市にある逢坂山にあった関所。京都から東国への出入口にあたる。逢坂の関は、男女が逢うことにかけて詠まれることが多い。○こまむかへ　陰暦八月、甲斐・武蔵・信濃・上野などの諸国から朝廷に貢進する馬を、左馬寮の役人が逢坂の関まで迎えに出ること。

通釈　また、逢坂の関に駒迎えに行く絵にそえる歌

なんだってまた私は、こんな夜中に逢坂に来てしまったのでしょう。夜が明けて、番人が関を開けてからでないと、駒牽きもできないのに。

参考　あふさかの関のし水に影みえていまや引くらん望月の駒

（古今和歌六帖　第一　一七六　紀貫之）

逢瀬の関所である逢坂の関を訪れるのは、当然夜であるが、今日は駒迎えに出向いたにもかかわらず、つい夜中に来てしまったというのである。

人の家のつりどのに、まらうどあまたありて、つきを見る

一七八　水の面にやどれる月ののどけきはなみゐて人もねぬよなれば

語釈　○つりどの　寝殿造りで、東西の対の屋から延びた廊の南端に、池に臨んで建てられた殿舎。○まらうど　客。よそから訪れてきた人。○なみゐて　「波」と「並み」の掛詞。「なみゐ」は、ワ行上一段動詞「並み居る」連用形。並んで座る・列座するの意。○人もねぬよ　人も寝ぬ夜。月をめでて、夜を明かす。庚申の夜、体内にいる三尸虫が、眠っている間に抜け出して天に昇り、その人の悪事を天帝に告げ、その結果命を奪われるという俗信があった。そのため、人々は管弦の遊びなどをしながら、夜を明かした。

通釈　ある人の邸の釣殿に客が大勢いて、月を見ている絵にそえる歌

池の面に宿っている月がいつになくのんびりと見えるのは、列座の人々が一晩中座を立つことなく、ゆったりと月を愛でる夜だからなのでしょうか。

九月　こたかがりするところ

一七九　里とほみ暮れなばのべにとまるべしいなおほせ鳥に宿やからまし

語釈　○こだかがり　小鷹は、隼などの小型の鷹。これを用いて、小鳥を捕獲する秋の鷹狩りをいう。○里とをみ　里が遠いので。「み」は、形容詞の語幹について、原因理由を表す接尾語。○

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

いものですよ。

参考　この歌は古今和歌六帖第一の一二〇番歌として、「なごしのはらへ」の項におさめられている。

七月　たなばたまつるところ

一七五　七夕は空にしるらんささがにのいとかくばかりまつる心を

語釈　○たなばた　牽牛織女の二星が一年に一度七月七日の夜に逢うという漢代の伝説から、二星を祭るという風習がおこった。後、裁縫の技の上達を願う乞巧奠の行事と結びついた。『荊楚歳時記』には、「七月七日為牽牛織女聚会之夜……是夕、人家婦女結綵縷、穿七孔、鍼或以金銀鍮石為鍼、陳瓜果於庭中、以乞巧。有喜子網於瓜上、則以為符応」と記す。七日の夕、色糸を結び瓜を置き、その瓜に蜘蛛が網をかければ、願いがかなえられるというのである。この一七五歌でも、「ささがにのいとかくばかり」と詠まれている。蜘蛛が糸をかけるほどというのは、願いがかなえられる証が示される程にという意味になる。○そらに　天空と形容動詞「そらなり」連用形の掛詞。「そらなり」は、何となく感知されるさま。○さゝがにの　「いと」を導く。○いと　蜘蛛の「糸」と副詞「いと」の掛詞。○かく　糸を「掛く」と副詞「斯く」の掛け詞。○まつる　「祭る」と縫う意の「まつる」の掛詞。「ささがに」「いと」「かく」「まつる」は縁語。

通釈　七月

七夕祭する絵にそえる歌

天空にある七夕の星々は、きっとよくわかって願いをかなえてくれることでしょう、こんなにも心をこめておまつりしている人の思いを。

十五日　瓷もたせて山寺にまうづる人

一七六　今日のためをれる蓮のはをひろみ露おく山に我はきにけり

語釈　○十五日　七月十五日、盂蘭盆会を行なう。祖先の霊を祀り供養をする仏教行事で、人々はそれぞれ供物をもって寺へ参詣する。○瓷　盆。供物をのせるもの。○もたせて　「せ」は、使役の助動詞「す」の連用形。従者に持たせての意。○おれ　「折れる」と「織れる」の掛詞。蓮の葉や茎からとる繊維は蓮の糸として、極楽往生の縁を結ぶものにたとえる。○蓮　盆の供物は、紙または蓮の葉で包んだ。○葉をひろみ　「み」は形容詞の語幹について原因理由を表す接尾語。ひろいのでの意。○をく　露が「置く」と奥山の「奥」との掛詞。

通釈　十五日

従者に供物をのせた盆を持たせて、山寺に参詣する人の絵にそえる歌

盂蘭盆供養をしようと、今日のために手折った蓮の葉に供物を包んで、蓮の広い葉の上に露の置いている、この奥山にある寺にはるばるやって来たことだなあ。

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

り」の尊敬語。○もり　森、杜。神域で、神霊の寄り付く高い木立のある所。○なびきても　カ行四段活用動詞「靡く」連用形＋接続助詞「て」＋係助詞「も」。「靡く」は、風に押されて傾き伏す意と、心を寄せる・慕い従う意とがある。ここでは、両方の意味を含んでいる。

通釈　四月

神まつりの絵にそえる歌

神が鎮座まします森に生えている下草は、風が吹くといっせいにひれふすけれど、その姿同様に人々がみなひれふし祈りを捧げて、神様をおまつりするころですよ。

参考　この歌は古今和歌六帖第一の八六番歌として、「神まつり」の項に収められている。

一七三　郭公まつにつけてもともしする人も山辺によをあかすらん

五月　ともしする人あり

語釈　○ともし　照射。古くからある鹿狩りの方法で、鹿の通り道に松明をともして待つ。○まつ　照射の「松明」と「待つ」の掛詞。○つけても　～に関して・ちなんでの意の「つけて」に、「松明」を点ける意の「つけて」を掛ける。

通釈　五月

照射する人がいる絵にそえる歌

郭公の声を待つにつけても思いやられることよ、松明をともして照射をする人も、今ごろ山辺で夜を明かしていることだろうなあ。

参考　この歌は古今和歌六帖第二の一一七〇番歌として、「ともし」の項におさめられている。

一七四　ねぎごとをきかずあらぶる神だにも今日はなごしと人はしらなん

六月　はらへ

語釈　○はらへ　祓。神に祈って罪やけがれを除くこと。六月の晦日に行なうものを、六月祓或いは夏越の祓と称し、荒魂を和す祓とされた。○ねぎごと　底本「よきこと」。諸本による。「ねぎごと」は「祈ぎ事」で、神仏に祈願する事柄。願掛け。○あらぶる神　「あらぶる」は、バ行上二段活用動詞「荒ぶ」連体形。荒々しくふるまう・乱暴だの意。○なごしと　「夏越」と「和し（なごし）」の掛詞。「和し」は、穏やかだ・和やかだの意。「荒ぶる神」ですら、夏越の祓で鎮められるというのである。○しらなん　ラ行四段活用動詞「知る」未然形＋願望を表す終助詞「なん」。知ってほしいの意。

通釈　六月

祓をする絵にそえる歌

願い事も聞き入れず荒れ狂う神であっても、今日夏越の祓をしている時だけは、和し（おだやか）なのだと、みんなにわかってほし

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

参考　袂は手首あるいは袖口の辺りを意味するが、平安時代以後袖を指すようになった。袖を裏返して寝ると、思う人が夢に現われるという俗信がある。また舞などのとき袖をひるがえすことを「袖返す」といい、「袖振る」は別れを惜しむ動作である。一般に袖が濡れるのは涙のためであるから、濡れそぼった袖を返すのは、男女間の情愛を連想させる。ところが、この歌の場合は荒田を耕す農夫を詠んでいる。「なに」の語で連想とのずれを指摘して、おかしみをねらっているのである。

三月　はなつみの処

一七〇　いかにして花をつままし花のかを袖にとめくるつみもこそうれ

語釈　○つみ　「罪」と「摘み」との掛詞。○うれ　ア行下二段活用動詞「得」の已然形。係助詞「こそ」の結び。

通釈　三月
花を摘んでいるところの絵にそえる歌
どうやって花を摘んだらよかろうか。この一面の花の中にいると、花を手折った上、さらに辺りのかぐわしい花の薫りまでも袖にしっかり染ませて、とんだ濡れ衣を着ることになるだろうよ。

参考　美しい女性を花にたとえる例は多い。花を摘むばかりか、たくさんの花の薫りを身にまとったのでは、浮気者の評判をたてられるだろうと歎いてみせたのである。

名にめでておれるばかりぞをみなへし我おちにきと人にかたるな　（古今和歌集　二二六　僧正遍正）
をみなへしおほかるのべにやどりせばあやなくあだの名をやたちなむ　（古今和歌集　二二九　小野良樹）

ゆみいるところ

一七一　春ふかき山にいればや梓弓ゆみ風にさへ花のちるらん

語釈　○春ふかき山　「ふかき」は、「春」「山」双方にかかる。○いればや　「いれ」はア行上一段活用動詞「射る」の已然形と「入る」の已然形との掛詞。「ば」は接続助詞、「や」は係助詞。○梓弓　梓の木で作った弓。○花　特定されないが、春の終わりに深山で微風に散っている花は、やはり桜のイメージであろう。

通釈　弓を射るところの絵にそえる歌
深まる春の一日深山に分け入ると、そんな所で弓を射るからか、梓弓のおこす風にさえ花ははらはらと散っているでしょうよ。

四月　神まつり

一七二　神のますもりの下草風ふけばなびきてもみなまつる比かな

語釈　○神まつり　陰暦四月中の酉の日は、賀茂神社の祭が行なわれた。○ます　サ行四段活用動詞「坐す」連体形。「あり」「居

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

しているともいえる。○種しあれば　「し」は強意の間投助詞。「あれば」はラ変動詞「あり」已然形＋接続助詞「ば」で、確定条件を表わす。種があるので。○まかせよ　ゆだねるの意の「まかす」に、種を蒔く意を懸けた。

通釈　子日の遊びをするところの絵にそえる歌

岩に生えて根を延ばしている小松も、子日には縁起物として根から引き抜かれてしまうけれど、種があるから、その種を蒔かせてその千年の寿命を私にまかせてくださいね。

参考　たねしあれば岩にも松は生ひにけり恋をし恋ひばあはざらめやは　（古今和歌集　五一二）

二月、むまのひ、いなりまうでの人

一六八　いなり山尾の上にたてるすぎすぎにゆきかふ人の絶えぬけふかな

語釈　○はつむま　初午。二月最初の午の日に行なう稲荷神社の祭礼。○尾上　「を」（峰）の上で、頂上・峰の意。○すぎすぎ　「杉々」と「次次」の掛詞。「次次」は副詞で、つぎつぎ・それからそれへの意。峰にそびえる杉木立の中を、参詣の人々が続々と通って行く光景を表す。

通釈　二月

初午の日、　稲荷の社に参詣する人々の絵に添える歌

稲荷山の峰に聳えたっている杉木立の中を、初午詣での人々がつぎつぎと行き交い、とだえることのない今日の日ですよ。

あらた、うつところ

一六九　おりたてばそこまでひつる袂さへなにうちかへすあら田なるらん

語釈　○あらた　「荒田」は放置して荒れた田、「新田」は新しく開墾した田である。どちらともとれるが、屏風歌の順序から見て、その年の稲作の準備風景が描かれているとみるべきである。前年稲を刈った後放置していた田を掘り起こし、水を引き入れて田植えの用意をするのである。「このめはるはるのあらたをうちかへし思ひやみにし人ぞこひしき」（古今和歌六帖　第二春のた）○おりたてば　タ行四段活用動詞「おりたつ」已然形＋接続助詞「ば」。「おりたつ」は、下に降りて立つ意と、身を入れて行なう意とがあり、ここは両方の意味をかけている。○ひつる　タ行上二段活用動詞「漬つ」連体形。水に浸る、ぐっしょり濡れる意。○なに　副詞。どうして、なぜ。○うちかへす　「袂」「あら田」双方にかかる。

通釈　荒田を耕すところの絵にそえる歌

田に下りたって懸命に仕事をすると、袂は裏までぐっしょりとぬれてしまう。どうしてそんな袂までも打返しながら掘り起こす荒田仕事なのでしょう。

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

過ごしてきたあとのことで、将来に期待する思いは強かったと想像される。順の歌人としての活動から見れば、天暦五（九五一）年撰和歌所の寄人に選ばれて以来、勅撰集撰者の一人として文芸活動を和歌世界に拡げた順は、漢詩文で培った語彙・音韻に関する知識を生かそうと試みた。天徳三（九五九）年の内裏詩合、翌年の内裏歌合への参加は、その活動の頂点を示すものといえるであろう。官途においては、高明の昇進に比例するかたちで、応和二（九六二）年民部少丞、翌年大丞、その翌年康保元（九六四）年下総権守、康保四（九六七）年に和泉守に任じられた。つまり、この屏風歌制作の時期は、高明の庇護の下、順がようやく官人として歩を進め始めた時期ということになる。順が和泉守に任じられた年に高明が失脚、順も和泉守の任期が終わると長い散位生活を送らねばならなかった。順の生涯においては数少ない、将来に希望を抱けた時期の詠歌といえる。屏風歌として祝賀の意がこめられるのは当然ではあるが、不遇・沈淪という陰りが見えないのも、そのような制作時期の影響であろう。

大納言源朝臣、大饗のところにたつべき四尺屏風調ぜしむるうた

元日

一六六　きのふまで冬ごもれりしみ吉野の霞はけふやたちてそふらん

語釈　○大納言　太政官の次官。大臣とともに国政に参与して可否を奏上し、宣旨を伝達した。○み吉野　「み」は接頭語。吉野の美称。奈良県吉野郡。万葉集以来の歌枕。参考の項に示したように、春の訪れが遅い所として認識されていた。○たちてそふらん　「冬ごもれりし」から雪に「添ふ」と解釈した。

通釈　大納言源朝臣が、大饗の場に立てるための四尺屏風をお作らせになる、その屏風に記す歌

元日

つい昨日まで雪に閉ざされ冬籠りをしていた吉野山も、新春をむかえる今日は春霞が立ち、雪景色に加わっていることでしょう。

参考　春霞たてるやいづこみよしののよしのの山に雪はふりつつ

（古今和歌集　三　よみ人しらず）

春たつといふばかりにやみよし野の山も霞みてけさは見ゆらん

（古今和歌六帖　四　春たつ日　壬生忠岑）

よし野山みねのしら雪いつきえてけさは霞のたちかはるらん

（古今和歌六帖　一七　ついたちの日　源重之）

子日するところ

一六七　いはにおふるねのびの松もたねしあればちとせの春はわれにまかせよ

語釈　○子日　正月上の子の日に丘にのぼり四方を望むと、陰陽の静気を得て煩悩を除くという思想に基づき、若菜を摘み小松を引く。「ねのび」は「根延び」に通じる。○岩に生ふる　岩の上では植物は生長しにくい反面、岩は堅牢磐石であるから安定

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

宮崎女子短期大学紀要　第22号　13-21頁

源順集「大納言源朝臣大饗屏風歌」注釈

原田真理

源順集の特徴のひとつは、多くの歌群を収録していることである。新編国家大観第三巻所収「源順集」二九八首のうち、「あめつちの歌」四八首、双六盤歌・碁盤歌六五首、前栽合記録三四首、「世の中をなににたとへむ」連作十首、計一五七首で過半数を占める。次に多いのが屏風歌で、八八首である。歌合出詠歌や代作歌をも含めると、十首増えて九八首となる。ほかにも東宮や斎宮等の御前における詠歌があり、個人的な詠歌は非常に数が少ない。源順集は、順の歌人としての活動記録としてとらえることができよう。今回の注釈は、「大納言源朝臣、大饗のところにたつべき四尺屏風調ぜしむるうた」をとりあげた。この「大納言源朝臣」は源高明とみるのが最もふさわしい。高明は順の庇護者であり、順は自らを高明の「僕吏」（「於西宮池亭同賦開花已匝樹」）と称するほどであった。高明の姉勤子内親王には順の母が仕えており、順が『倭名類聚抄』を編んだのは、その縁によるものである。高明等の母周子が順と同じく嵯峨源氏であることから、血縁を基として一家を挙げて親しく仕えていたものであろう。大饗とは平安時代、宮廷や貴顕の家において常例または臨時におこなった大饗宴をいう。中宮・東宮の二宮大饗と、大臣家のものとがある。二宮大饗は正月二日、左右大臣家では正月三・四日におこなわれるのが常例の原則であったが、次第に不定となった。甲田利雄氏は『九條殿記』を引いて、師輔が大臣家大饗を公事に準ずるものと認識していた点を指摘しておられる（『平安朝臨時公事略解』）。臨時の大饗は、新たに大臣に任じられた者が行なう饗宴を指す。この順集の詞書では、大納言家の饗を大饗と称していることになり、不審である。高明が大納言であったのは、天暦七（九五三）年九月二十五日～康保三（九六六）年正月十六日であり、正月十七日に右大臣に任じられている。試案として、高明が大臣に任じられる康保三年の折、前以て準備したものとする。順と高明との親密な関係からいって、ありえないことではないと思う。高明が右大臣に任じられたのは康保三年正月十七日であるが、昇進の決定はこれ以前になされたはずであり、その情報は速やかに高明の許に伝えられたにちがいない。すなわち、大納言高明邸において大饗の準備がなされたのであり、その屏風歌を家人ともいうべき順に依頼するのは当然ともいえる。つまり、詞書のごとき状況が生ずるのである。高明の著した『西宮記』では、任大臣の饗を大饗とは呼んでいない。しかし、これは『源順集』の記述を制約するものではなく、また高明の任大臣は正月のことでもあり、大饗の称も不適当ではないと考える。高明が五十三歳、順は五十四歳の春を迎えようとする時である。二人とも、あまり恵まれたとはいえない時期を

NII-Electronic Library Service